

【一】 次の文を読んであとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（設問の都合上、本文に一部表記を改めたところがあります。）

トゲを持つ植物の中で、①高度な防御システムを持つのが、野山に生えるイラクサである。

イラクサの茎や葉には細かなトゲが密生している。ところが、イラクサが持っているのはただのトゲではない。トゲの根元には毒を含んだ小さな袋が備えられている。

A、皮膚に刺さるとトゲの先端が外れ、注射針のように傷口に毒を注入するのである。

植物は、化学物質で身を守るか、トゲのような物理的手段で身を守るか、どちらか一方を持っているものが多い。その両方をかねそなえるというのは、簡単ではないのだろう。

B、イラクサは、トゲと毒という両方をかねそなえている。

また、ただ刺すだけでなく、袋から毒を注入するというイラクサの高度なしくみは、スズメバチの毒針やマムシの牙とまったく同じである。イラクサは植物でありながら、生物界で最高レベルの防御システムを持っているのである。

どんな植物も食べてしまう草食動物も、このイラクサだけは、食べるどころか近寄ることさえできない。もちろんイラクサのとげは人間にも害があり、刺毛にさされると赤く腫れ上がってしまう。イラクサは漢名を「葶苈」という。C、イラクサはアレルギー発疹である葶苈疹の由来となったほどの有害植物なのである。

ちなみに、このイラクサのトゲが刺さった状態が「いらいらする」と言う感覚である。

②植物にとって、常に哺乳動物に食べられる危険にさらされている場所がある。草原である。

深い森であれば、草や木が複雑に生い茂り、すべての植物が食べつくされることはないだろう。しかし、見晴しの良い草原は、植物も隠れる場所がない。さらに、生えている植物の量も限られている。草食動物たちは、少ない植物を競い合うように食べにくる。

草原で必要なことは、他の植物と競争することよりも、草食動物から身を守ることなのだ。

それでは、植物たちは、どのように身を守れば良いのだろうか。草原で食べられる植物として、③際立った進化をとげたのが、イネ科植物である。

コメやコムギ、トウモロコシなどイネ科の作物は、人間にとって重要な食糧である。しかし、人間の食用になっているのは、植物の種子の部分である。イネやコムギ、トウモロコシの葉は、煮ても焼いても食べることができない。イネ科植物は、④葉が固いので、とても食べられないのだ。

イネ科植物の葉が固いのは、草食動物から身を守るためである。イネ科植物は葉の繊維質が多く消化しにくい。さらに、イネ科植物は、葉を食べにくくするために、ケイ素で葉を固くしている。ケイ素はガラスの原料にもなる物質である。野原でススキの葉で指を切ってしまった経験をもつ方もおられることだろう。ススキは、葉のまわりがのこぎりの刃のようにガラス質が並んでいる。こうしてイネ科植物は葉を食べられないように身を守っているのである。

それだけではない。さらには作り出した栄養分を、安全な地面の際や地面の下に避難させて蓄積する。そして、地面の上の葉はタンパク質を最小限にして、栄養価を少なくし、エサとして魅力のないものになっているのである。このように、イネ科植物は葉が固く、消化しにくい上に栄養分も少ないという、動物のエサとして適さないように進化をしたのである。

イネ科の植物がガラス質を体内に蓄えるようになったのは、六〇

〇万年ほど前のことであると考えられている。この変化は、植物と動物との戦いにとって、劇的な変化であった。このイネ科の進化によって、草食動物の多くが絶滅したと考えられているのだ。

（稲垣栄洋「たたかう物語―仁義なき生存戦略」）

問1 A C にあてはまる言葉を次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ところが イ じつは ウ なぜなら エ そして

A	
B	
C	

問2 この文章を内容のまとまりから二つに分けると、後半の部分はどこからになりますか。初めの四字を本文中から抜き出して答えなさい。

問3 ①「高度な防御システム」とありますが、これはどういうことですか。本文中から三十五字以内でさがし、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

初め					
終わり					

問4 ②「植物にとって、つねに哺乳動物に食べられる危険にさらされている場所がある。草原である。」とありますが、どうして「草原」が「危険」なのです。本文中の言葉を用いて四十五字以内で答えなさい。

問5 ③「際立った進化」とありますが、どういう進化のことですか。それを表す一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問6 ④「葉が固い」とありますが、イネ科の植物の「葉が固い」のは、どんな成分を持っているからですか、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

--	--	--	--	--

問7 本文の内容と合致するものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア スズメバチやマムシなどの昆虫や動物の持つ防御システムは、イラクサの持つものより優れている。
 ウ コメやコムギ、トウモロコシなどイネ科の植物は、人間にとって食べることができないものである。
 エ イネ科の植物は、作り出した栄養分を、安全な地面の際や地面の下に避難させて蓄積している。
 オ イネ科の植物が進化したことにより、草食動物がほとんど絶滅したと考えられている。

--

② 次の文を読んであとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、本文に一部表記を改めたところがあります。)

「見学？」

教室のすみで新入部員の指導していた顧問の先生が、千鶴としほりに気がついた。

ベートーヴェンみたいな髪かみの男の先生。でも、顔はあそこまでやばくない。

「あ、はい」

「よろしくお願いします」

あわてて頭をさげたふたりに、「入っておいで」と手まねきする。

ふたりが足を①ふみいれるなり、先生はほんと両手を打って部員たちと呼びかけた。

「一年生が来たから、ちよつと聴かしてやって」

たちまち、パートごとの小さなかたまりがほぐれ、教室の中心に全員が集合した。先生の指揮棒しきぼうにたぐられて、その大きなかたまりから

②蒸気のようにメロディーが立ちのぼる。最初はふんわりと。ひとつ、またひとつと音が増え、メロディーがふくらむ。ふくらむ。ふくらむ。ひとりひとりの奏でる楽器が、重なることでその音色を深め、引き立て、美しいハーモニーを育てていく。

砂浜の波が引いたあとで足もとの砂がすつと動くみたいに、千鶴の心は音のほうへと引き寄せられた。曲が終わったときにはすっかり感動していた。なんの曲かもわからない。上手な感想だってひとことも言えなかったけれど、ベートーヴェン先生は「またおいで」と笑ってくれた。

「なんか、すごかったよね」

「うん。すごいよね、吹奏楽部。っていうか、中学生ってすごい！」
 「ほんと、レベルが高かった。小学校の鼓笛隊こてきなんて③目じやないね」

「目じやない、目じやない」

「うちらも練習したらあんなふうになれるのかな」

帰り道、野球部の時とは打ってかわって、ふたりのテンションは高かった。千鶴の感動がしほりに、しほりんの興奮が千鶴にのりうつり、ふたりしてどんどん高まっていくみたい。

「決めた。あたし、吹奏楽部に入る。千鶴もやろうよ」

しほりに誘われるまでもなく、千鶴の気持ちも④吹奏楽部へかたむいていた。

放課後の音楽室にいる自分を、千鶴はたやすく想像できた。すぐに上達するほど器用じゃなくても、まじめに練習をつんで、着実に成長していく自分。仲間や先輩たちともそれなりにうまくやっていく。

⑤ありありとイメージできる。できすぎる。

「あのね、わたし……中学生になったら、変りたいって、思ってたんだ」

千鶴は初めてしほりに打ちあげた。

「いままでとはちがう自分になりたくて。吹奏楽部は、すごくいいと思うし、すごくやってみたい。でも、それじゃ、いままでのわたしといっしょって気持ち……」

うまく言えない。じれったくだまりこむ千鶴の横顔を、しほりんがじつと見つめている。千鶴が本気のとき、しほりんはいつもおなじくらしい本気で、なにかを返そうとしてくれるのだ。ちよつどいい言葉が見つからないときには、見つかるまでずっとだまっている。

けれど、この日は早かった。

「うん」

胸もとのスカーフをのぞきこむように、しほりんはこくんとうなずいて言ったのだ。

「わかるよ。千鶴の気持ち」

「え」

「あたしも、そんなふうと思うことあるし」

「しほりんも？」

「うん。でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う」

「そうかな」

「わざと自分らしくないことをするより、千鶴は千鶴らしいことをして、いままでの千鶴以上にそれをがんばって、そのさきに、⑥いままでとちがう千鶴がいるんじゃないのかな」

千鶴は千鶴らしいことをして、いままで以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでとちがう千鶴がいる――。

千鶴はその言葉を吸い込んだ。とたん、夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えた。

「うん。そうかも。そうならいいな」

すうっと肩から力がぬけた。

「ありがとう、しほりん。わたし、決めた。明日、仮入部届けをもつて、ヴェンに会いに行くよ」

(森 絵都 「クラスメイツ」)

問1 ①「ふみいれるなり」とありますが、この部分をわかりやすく言い換えなさい。

--

問2 ―②「蒸気のように」とありますが、ここに用いられている表現技法は何ですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬人法 イ 倒置法
ウ 直喩 エ 隠喩

問3 ―③「目じゃない」とありますが、この慣用句の本文中の意味として適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 見向きもしない イ 取るにたりない
ウ 感心しない エ 見ていられない

問4 ―④「吹奏楽部へかたむいていた。」とありますが、「千鶴の気持ち」が「かたむく」とは、どうすることに気持ちがかたむくことですか。十字以内で答えなさい。

問5 ―⑤「ありありとイメージできる。できすぎる。」とありますが、これはどのような気持ちですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今までと違う自分になっている姿がありありと浮かび、ぜひここに入りたいという希望が強くなっている。
イ 今までと同じように一生懸命な自分の姿がありありと浮かび、ここでやっていけると確信している。
ウ 今までと同じようにやっている自分の姿がありありと浮かび、それでいいのだろうかと迷いが生じている。
エ 今までと違う自分になれるような気が全然しないけれど、それでいいのだと納得しようとしている。

問6 ―⑥「いままでとちがう千鶴」とありますが、それはどのような千鶴ですか。「自分らしい」「成長」という二語を使って、四十文字以内で答えなさい。

問7 千鶴の気持ちが変わったことが、風景の描写からわかる一文があります。本文中からその一文を探し、初めの三字を抜き出して答えなさい。

三 次の①～③の文の――線部と文法的に同じ性質のものを、あとのア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① この日のことは、決して忘れない。
ア 何も急ぐことはない。
イ 眠ってばかりいられない。
ウ ちつとも美しくない。
エ 見るだけではつまらない。

② 小説を読んで感想文を書きました。

- ア 私は学生である。
イ 自転車|学校に通う。
ウ 雄大で美しい景色。
エ 泳いで|島に渡る。

③ 名前が呼ばれるまで、じっと待っていた。

- ア 足を踏まれる。
イ 故郷がしのばれる。
ウ 白い雲が流れる。
エ 先生が手本を書かれる。

四 次の①～⑤の文の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① ムゾウサ|にボールを投げる。

② きげんをソ|ねる。

③ テツボウ|にぶら下がる。

④ 生地をハサミでタ|つ。

⑤ デサ|りの状態。